



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 1992, 70: 219-232

ISSUE DATE:

1992-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48370>

RIGHT:

彙 報

1991年（平成3年）1月～1991年（平成3年）12月

研 究 状 況

I 班 研 究

日 本 部

文学から何がみえてくるか 班長 飛鳥井雅道

3年目に入った当研究班では、引きつづき読書会の部で『ロビンソン・クルーソー』の本邦初訳である『漂荒紀事』の会読をすすめている。というのも、「遅れてきた国々」の近代文学成立において、『ロビンソン・クルーソー』は必ずといって良いほど翻訳されており、日本文学においてもそれは例外ではなく、明治期のすべてにわたってさまざまに形を変えて登場しているのである。とりわけ『漂荒紀事』は、近世末期の日本人が文学という形をとった「異界」をどのように捉えたかという点でも興味深い。

本報告はこれとは別に各担当者の個別研究を報告していただいたが、文学における「異界」や「漂流」が多く取り上げられ、研究会の今後の展開にも一つの方向が見えてきたようである。

班員 飛鳥井雅道 宇佐美齊 大浦康介 佐々木克 鈴木啓司 富永茂樹 藤田隆則 斎藤希史（以上所内） 池田浩士 加藤幹郎 木村崇 三原弟平 若島正 松田清（以上教養部） 生田美智子 米井力也（金蘭短大） 須田千里（光華女子大） 谷川恵一（高知大） 林完枝（大阪市大） 平田由美 藤元優子 松村耕光（以上大阪外大） 堀田桂子 濱田秀

1991年

2月27日 〈居〉の文学

斎藤

3月23日 異境のまなざし

池田

ゲルツェンと「どろぼうかささぎ」

生田

4月24日 『漂荒紀事』会読

松田

5月8日 漂流と異界―『北槎聞略』と『仙境異聞』・そして馬琴の幻想的世界／日本におけるロビンソン受容の前提― 飛鳥井

22日 『漂荒紀事』会読 松田

6月12日 『漂荒紀事』会読 斎藤

26日 マレー語版『ロビンソン・クルーソー物語』とその時代―インドネシア翻訳文学事始め―

押川典昭（ゲスト）

9月21日 鏡花少年物考 須田

10月9日 『漂荒紀事』会読 斎藤

23日 漂流と時間―ランボオの「酔いどれ船」をめぐる― 宇佐美

11月13日 『漂荒紀事』会読 米井

27日 ワシントン豪傑物語―蘭学はいかにして婦女童蒙向け海外知識となるか― 平田

12月14日 〈小説〉の冒険―政治小説とその華訳をめぐる― 斎藤

開花期における歴史と文学 谷川

近代日本のアジア認識 班長 古屋哲夫

本研究は、近代日本においてアジアという言葉が、どのような情報にもとづき、どのような目的のもとに使用されてきたかを、明らかにしようとするものである。そしてそのためには、(1)アジアからの情報が日本にもたらされる道筋と仕組、(2)日本人のアジアへの要求のあり方と進出の仕方、(3)アジアの観念を利用した日本人の国民的使命観の創出、などの問題を検討することが必要となる。

班員 古屋哲夫 石川禎治 落合弘樹 藤井譲治 水野直樹 安富歩 山室信一 山本有造 横山俊夫（以上所内） 筒井清忠 松尾尊兌（以上文学部） 秋定嘉和（池坊短大） 伊藤之雄（名古屋大） 奥村弘（神戸大） 尾崎ムゲン（大阪女子大） 掛谷

宰平（立命館大） 桂川光正（大阪産業大） 木坂
順一郎（竜谷大） 呉宏明（精華大） 小泉洋（六
甲高校） 小路田泰直（奈良女子大） 斎藤勇（愛
知大学） 里上竜平（桃谷高校） 須崎慎一 鈴木
正幸（以上神戸大） 武邦保（同志社女子大） 田
中真人（同志社大） 永井和（立命館大） 福井直
秀（京都文化短大） 三原容子（京大研修員） 松
田利彦 森田一彦（以上京大院生）

1991年

1月21日 中国分割政策の形成と展開 古屋
2月4日 韓国案内にみる朝鮮認識 里上
25日 近代東アジア世界における社会科学
思想の連鎖 山室
5月20日 戦後マルクス主義史学のアジア認識
永井
6月3日 租界と日本人—天津を例に— 桂川
17日 幣原外交の中国認識 古屋
7月1日 研究方針打合せ会 全員
9月30日 第一次大戦とアジア主義 古屋
10月21日 教育界におけるアジア諸国像の展開
—1910年代を中心に— 尾崎
11月18日 「台湾協会報」にみられるアジア認
識 呉
12月2日 「地方牧師」 柏木義円のアジア認識
武
16日 タゴールに対する日本人の反応 三原

貝原益軒とその時代

班長 横山俊夫

17世紀後半から18世紀初頭にかけての安定期日本
社会の性格を考えるため、貝原益軒の著述を学際的
な視野から検討している。益軒の知的活動の広さと
読者層の多様さが、その著述に独特の社会性を与え
ていたと考えられるからである。

第4年度前期は、ひきつづき資料輪読に重点を置
いたが、後期より、報告書作成にむけ、班員各自の
論文要旨発表を始めている。なお本年度の客員とし
て、インディアナ大学からジョージ・エリソン教授
を迎えた。

班員 横山俊夫 ジョージ・エリソン 塚本明
富永茂樹 藤井譲治 三浦秀一 麥谷邦夫（以上所
内） 梶山雅史（岐阜大） 白幡洋三郎（日文研）
辻本雅史（光華女子大） 深澤一幸（大阪大） 三

浦国雄（大阪市大） 横田冬彦（神戸大） 松村浩
二（大阪大院生）

1991年

1月26日 18世紀における博物学的「知」の成
立 松村
2月4日 益軒の読者 横田
18日 益軒木曾路の旅 深澤
25日 『田圃備忘』の植物学的検討 白幡
4月22日 好古『八幡宮本紀』序・叙・題・卷
之一 辻本・横山
5月13日 『八幡宮本紀』卷之二 麥谷・塚本
20日 『八幡宮本紀』卷之三 松村・深澤
6月3日 『八幡宮本紀』卷之四 藤井・横田
10日 益軒『自娛集』抄論 松田・梶山
17日 『自娛集』抄論 辻本・深澤・横山
24日 『自娛集』抄論 麥谷・白幡
7月1日 合評会／横山・藤井編『安定期社会
における人生の諸相』上・下 全員
9月30日 『大疑録』への道 三浦秀
10月7日 近世前期の大名と侍講 藤井
21日 “博物学的言説”としての益軒 松村
28日 益軒の儉約論・養生論と都市社会 塚本
11月11日 益軒の読者層 横田
18日 “術”の学 辻本
12月2日 益軒の資源観 白幡
9日 羅馬人の処置—新井白石とシドッチ
潜入事件 エリソン

「満洲国」の研究

班長 山本有造

本研究は、日本の植民地支配の主要な一環をなし
た「満洲」—中国東北地域—につきその最終形態で
ある「満洲国」期に焦点をあつめ、そこでの支配の
実態を総合的に（政治的、経済的および文化的諸側
面、ならびに日本植民地史のおよび中国地方史的ア
プローチを合せて）究明しようとする。1年間の準
備会ののち、1987年4月より正式に発足し、現在隔
週月曜日に研究会を開いている。

1990年—1991年の2カ年の期間延長を許可されて
全計70回の研究会を行ってきたが、1991年度をもっ
て会を終了し、報告書の刊行を行う予定である。

班員 山本有造 古屋哲夫 水野直樹 安富歩

山室信一（以上所内） 井村哲郎（アジ研・図書資料部） 岡田英樹（立命館大・文） 奥村弘（神戸大・文） 副島昭一（和歌山大・経） 西村成雄（大阪外大・外国語） 松野周治（立命館大・経） 松本俊郎（岡山大・経） 村田裕子（山梨県立短大）

1991年

1月14日 張学良の90年と20世紀中国政治史研究—張学良研究の課題について—

西村

28日 「満洲国」の人口推移

松本

2月18日 「満洲国」の外交

山室

4月22日 「満洲中央銀行」の資金創出・資金投入メカニズム

安富

5月13日 日本における植民地地方制度をいかに考えるか—山田公平「近代日本の国民国家と地方自治」を素材として—

奥村

27日 近代中国における日人顧問—辛亥革命を中心に— 李廷江（ゲスト）

6月10日 美濃部洋次と満洲関係「美濃部洋次文書」

松本

24日 「満洲日報」からみた「満洲国」建国過程

古屋

7月8日 「満洲国」論についての一視角

山室

9月9日 張作霖政権時期の奉天省財政の一面—王永江を中心として—

渋谷由里（ゲスト）

10月14日 太平洋戦争期における「満洲国」国民所得と国家資金計画

山本

28日 現大洋票の発行をめぐる

西村

11月11日 満洲戦時インフレーション

安富

25日 大東亜建設審議会と戦時統制

松本

12月9日 「満洲国」の文芸政策

岡田

明治維新期の研究

班長 佐々木 克

現在の日本近代史研究の傾向は、かつて明治維新を絶対主義天皇政権の誕生とみなした見解から、論者によって様々な註釈がつけられながらも、それはブルジョア革命であった、とする理解が主な潮流となっている。こうした変化をもたらしたのは、政治と党派という外的要因を別にすれば、理論と解釈

の深化というより、60年代後半から急速に展開した、地方自治体史の編さんの刊行にともなう史資料の発掘と、公・私文書の大量の公開・刊行という、史資料における新たな研究状況の発生がその最大の要因といえよう。しかしながら、明治維新についての発言は、ほぼ近代史の研究者に限られ、また新史料も必ずしも十分に消化・吸収が出来ているとはいえない。そこでこの研究班では、近世史研究者の協力を得て、およそ以下のような方法で研究会を進めている。①新史料を把握した上で、研究史の再検討を試みる。②明治維新を化政期から憲法体制成立期（およそ19世紀全体）に至る長い時空の中で考える。③政治・思想・文化・経済・社会等々さまざまな分野からのアプローチを、ジャンルにとらわれない発想で分析する。④従来は主として維新の変革の面に視点を注ぎがちであったが、連続の面にも留意する。以上のことを基本的な方針として設定し、各自の問題関心と当面のテーマをもとに研究発表と討論で研究会を運営してきたが、3年間の研究と討論により、各人に共通する明治維新のイメージも形成されつつある。そこで本年度は、最終年度でもあるので、それぞれが、成果報告としての論文執筆を念頭に置いて、研究発表を行ってきた。

班員 佐々木克 飛鳥井雅道 落合弘樹 塚本明 藤井譲治 山本有造（以上所内） 青山忠正（大阪商大） 池田宏（滋賀県立図書館） 井上章一 園田英弘（以上日文研） 今西一 鈴木祥二（以上立命館大） 奥村弘（神戸大） 小股憲明（大阪女子大） 高久嶺之介（同志社大） 谷山正道（天理大） 高木博志（北海道大） 辻ミチ子（京都文化短大） 辻本雅史（光華女子大） 原田敬一（仏教大） 平田由美（大阪外大） 藪田貫（関西大） 勝部真人（大阪教大附高） 手島一雄（立命館大学院生） 三沢純（広島大院生）

1991年

1月25日 稲作技術の近代化と農政 勝部

2月8日 史蹟・名勝の成立 高木

4月26日 明治初期の軍事と警察 鈴木

5月17日 天皇と名望家層 佐々木

6月14日 書評・片桐芳雄『自由民権期教育史研究』 小股

28日 帝国議会における秩禄処分問題

7月12日	近代日本の「国民国家」と地域社会	落合 今西	6月10日	永井家文書 片桐且元・大久保長安について	宮本 杉田
10月18日	熊本藩明治3年藩政改革と人民諸階層	三沢	24日	永井家文書 史料検索	横田 全員
11月1日	明治憲法・私擬憲法・西洋憲法の君主規定比較	小股	7月8日	永井家文書 国奉行制について	母利 藤田
12月13日	近代日本における「国民」形成と地域社会について	奥村	9月9日	永井家文書 史料検索	藤井 全員
近世前期における政治的主要人物の居所と行動			30日	永井家文書 板倉勝重の居所	杉田 横田
班長 藤井譲治			10月14日	永井家文書 史料検索	藤田 全員
近世前期において重要な役割を果たしてきた人物の多くは、江戸時代一般の像からすれば思いのほか活発な動きをしており、この期の政治史さらには文化史を考えていく上で、彼等のそれぞれの時点での居所を確定しておくことは、基礎的かつ不可欠である。そこで、このような基本的情報を学界全体が共有できるように蓄積し、同時に従来年紀がないゆえに十分に利用されてこなかった主要人物の書状類の年代確定を行う。こうした作業を通じてこれまでとは異なる近世前期の歴史を描くことを目指している。本年は昨年に引き続き各自担当した主要人物について、これまでの研究史を検討しつつ居所確定の作業を進め、加えて「八人衆」として上方支配に大きな役割を果たした永井家の文書を輪読した。			28日	永井家文書 大坂町奉行の成立について	藤田 宮本
			11月11日	永井家文書	母利
			12月2日	永井家文書 「支配国」について	藤井 母利
			9日	永井家文書 史料検索	藤井・宮本 全員

西 洋 部

法的思考の研究		班長 山下正男
20世紀における論理学の研究はまことにめざましいものがあるが、そうした論理学はすべての存在の論理学と呼ばれるべきであって、当為の論理学の研究は大そうおこなわれている。本研究はそうしたアンバランスを是正することを目的とする。		
そのために(1)義務論理学(deontic logic)の確立、(2)法律家たちの現場における法的思考法の分析、(3)一般人の倫理・道徳の場における思考上の分析、等の諸作業をおこないたい。以上の作業は理論学、法学、倫理学の各分野の専門家たちが共同しておこなうものとする。		
班員 山下正男 井狩彌介(以上所内) 足立幸男(教養部) 阿部昌樹 川浜昇 田中成明 山本克己 中山竜一(以上法学部) 浜野研三(文学部) 今井弘道(北大) 植松秀雄 江口三角(以上岡山大) 亀本洋(金沢大) 玉木秀敏(大阪学院大) 服部高宏(国学院大) 平井亮輔(京都工繊大) 平野仁彦(三重大) 深田三徳(同志社大) 松浦好治(大阪大) 森際康友(名古屋大)		

班員 藤井譲治 塚本明(以上所内) 杉田善雄(京大研修員) 宇佐美英機(京都橘女子大) 藤田恒春(関西大) 横田冬彦(神戸大) 母利美和(彦根城博物館) 宮本裕次(神戸大院生)

1991年

1月28日	久貝正俊・石河勝政・曾我古祐・島田直時の居所	宮本
	中井家文書	塚本
2月18日	五味豊直の居所	藤田
	『大工頭中井家文書』編年と中井正清の居所	藤井
4月22日	打合せ会 史料検索	全員
5月13日	永井家文書 永井直清の居所	藤田
20日	永井家文書 史料検索	藤井 塚本 全員

山本顕治（滋賀大） 若松良樹（東和大） アスキ（奈良県立医大） 山辺規子（京都橋女子大）
 ユー・デイビッド 植木一幹 1991年

1991年

- 1月25日 ペクツェニック—法的議論の基礎—
 山本（顕）
 4月26日 賢明な状況理解—Weber と Well-
 mer— 今井
 5月10日 T. エコフの法理論 服部
 24日 不可譲の権利について 深田
 6月7日 穏健リバタリアニズムとリーガリズム—
 J. M. ブキャナンの公共選択論— 田中
 28日 Ch. ベレルマンの議論の理論 江口
 7月12日 中絶裁判と法的思考 浜野
 19日 いわゆる「第三の波」理論について
 山本（克）
 9月27日 これまでの研究会の反省および論文
 集に関する検討会 全員
 10月11日 集合的営為としての法思考—批判法
 学とコンヴェンションナリズム— 阿部
 25日 妥協について 平井
 11月22日 法的整合理論 平野
 12月13日 法化に対するトイブナーのアプローチ
 毛利

家族とハウスホルドの比較史的研究

班長 前川和也

工業化以前の社会において、「家族」ないし「ハウスホルド」の果たした様々な機能を考察している。結婚や相続にまつわる諸慣行やライフサイクルの諸問題、親族構造など班員の関心は多様であるが、3年目に入り個別の報告には一定の成果が窺える。また、報告書の作成を視野に入れ、相互の討論をさらに重ねている。

班員 前川和也 岩熊幸男 佐々木博光 田中雅一 富永茂樹 横山俊夫（以上所内） 夫馬進（文学部） 阿河雄二郎 南川高志（以上大阪外大） 井上浩一 大黒俊夫（以上大阪市大） 江川温 川北稔（以上大阪大） 川島昭夫（神戸市外大） 川本正和（奈良産業大） 小山哲（島根大） 鈴木利章（神戸大） 田中峰夫（甲南大） 波多野敏（京都学院大） 早川良弥（梅花女子大） 三成美保

- 1月22日 ローマ帝国における家族と政治 南川
 29日 ル・プレーと《直系家族》の觀念 富永
 2月5日 中世ヨーロッパの親等図の類型 岩熊
 4月2日 Die europäische Sonderweg der Familienentwicklung unter besonderer Berücksichtigung des Gesindewesens Michael Mitterauer（ウィーン大学）
 16日 研究会方針討論 全員
 23日 古代シュメールの地方名門家門と政治権力—ウル第三王朝ウンマの円筒印章より— 前川
 5月7日 教区と家—17世紀シュロップシャー・ミドル教区— 川島
 21日 イトコ婚の諸相と家族 田中
 28日 12世紀ドイツ貴族の家意識—ヴェルフエン家の場合— 早川
 6月4日 説教史料と家族史研究—シエナのベルナルディーノの説教から— 大黒
 18日 近世ロンドンの家族—寡婦の立場を中心に— 川北
 25日 農民の「家」と労働者の家—オーストリア・ケルンテン州のフィールド・ワークより— 森 明子（国立民族学博物館）
 7月2日 アサバ（男系親族）とイブン・ハルドゥーンのアサビーヤについて 川本
 9月24日 修道院設立文書とビザンツ貴族のイエ—史料紹介— 井上
 10月1日 妻の財産・夫の管理—近世チューリヒの夫婦財産制— 三成
 15日 17世紀フランスの大貴族の財産と相続 阿河
 22日 封建貴族の親族と親族記述 江川
 11月5日 16世紀のポーランド貴族の家政観 小山

19日	中国・明清時代における寡婦と再婚 夫馬	16日	会話分析を用いた授業研究 知識と秩序(Ⅱ)	平 班長 阪上 孝
26日	民法典成立前の夫婦財産制—法と公証人実務— 波多野		本研究班は、1990年3月で終了した共同研究「知識と秩序」の成果をふまえつつ、さらにフランス革命期以降の近代諸国家の形成まで視野をひろげ、科学的知識と社会秩序の相互関係の再検討を進めている。2年目の現在は、フランスを中心に、アメリカ、イギリス、日本の近代化について報告・討議を積みかさねて、基本的な問題点の整理を進め、その一方で、時折ゲスト・スピーカーを招いて、近代化の諸問題を多様な視点から再検討している。また同時に、「知識と秩序」(Ⅰ)報告書の作成も進めた。	
12月3日	家(tui)の離合集散と系譜の拡大 戦略—東アフリカの牧畜社会ボディにおける歴史イデオロギーと民族関係— 福井勝義 (国立民族学博物館)			
17日	12世紀のジェノヴァにおける婚資 山辺			
コミュニケーションの自然誌 班長 谷 泰				
第1年度はまず、本研究にとって関連性のある諸理論を批判的に論ずることに力点をおき、G. ベートソン、E. ゴフマンの他、言語理論にも係わる著作を取りあげた。他に班員の蒐集したデーター分析の報告をおこなった。来年度は、おもに日常的な会話場面についての蒐集データーの分析にあたる予定である。				
班員 谷泰 田中雅一 藤田隆則(以上所内) 高畑由起夫 細馬宏通 木村大治(以上理学部) 菅原和孝(教養部) 北村光二(弘前大) 串田秀也(愛媛大) 野村直樹(名古屋女子商科大) 澤田昌人(山口大) 野村雅一(国立民族学博物館) 早木仁成(神戸学院大) 深尾葉子(大阪外国語大) 水谷雅彦(神戸大) 宮脇幸生(大阪府立大)				
1991年				
4月15日	コミュニケーションの自然誌にむけて—問題提起— 谷	1月18日	ドイツ人のフランス革命観 シェフェール	
5月27日	G. ベートソンと芸能の問題 藤田	2月15日	原稿検討会 全員	
6月3日	ゴフマンの“frame”概念をめぐって 串田	22日	国土の発見 阪上	
17日	「すりかえ」の理論化 野村	3月8日	原稿検討会 全員	
7月1日	会話における沈黙長の普遍性と多様性 細馬	22日	原稿検討会 全員	
15日	コミュニケーションにおける冗長性と回帰性 北村	4月26日	ル・プレーと直系家族の発見 富永	
10月7日	冗長性と情報 木村	5月10日	王の二つの身体 大澤	
28日	メンタル・スペースとフレーム 谷	24日	マルサス主義と「不幸」の処理 光永	
11月11日	ひとつの声で語ること 菅原	6月7日	国民国家と社会の統計的把握 阪上	
12月2日	ファティック・コミュニオン 藤田	21日	共和制の社会と法律家 小林(清)	
		7月5日	代議政の創出 水嶋	
		9月20日	歴史の中の憲法概念 石井	
		10月4日	近代日本に見る生と性の秩序 牟田	
		18日	フィジオクラートと外交観の変貌 市田	
		11月15日	父の肖像 阪上	
		29日	サドにかんする二、三のことがら 大浦	

12月13日 ポスター『情報組織論』をめぐって
室井

古典インドの法と社会

班長 井狩彌介

「法（ダルマ）」は、インド文明の構造を理解するためにもっとも重要な鍵となる概念である。「ダルマ」の観念は、古典インドはもとより現代に至るまで、インド文明の社会秩序と文化規範の思考の枠組みの基調低音をなすものとして機能し続けてきた。このような「ダルマ」を中心主題として編纂された文献群が「法典」である。本研究班は、ヒンドゥー社会の行為準則集として成立した古典インド法典の形成期に焦点をあててきたが、法典を狭義の法律集成として扱うのではなく、いわばヒンドゥー教文化を映す鏡として扱う立場を打ち出している。具体的には、「ヤージュニャヴァルキヤ法典」を取り上げ、インド学各分野の専門家の協力のもとに、その文体と内容の分析を行いつつ、本法典の成立過程と内容の歴史的な位置づけを検討する事を当面の作業課題としている。初年度に当たる本年は、これまでに本法典の約四分の一に相当する部分の検討を終えている。

班員 井狩彌介 荒牧典俊 船山徹 山下正男（以上所内） 徳永宗雄 御牧克己（以上文学部） 赤松明彦（九州大） 永ノ尾信悟 土田龍太郎（以上東京大） 榎本文雄（華頂短大） 狩野恭 黒田泰司 八木徹（以上大阪学院短大） 後藤敏文 後藤純子 藤井正人（以上大阪大） 島岩（金沢大） 正信公章 渡瀬信之（以上東海大） 高島淳（愛知県立大） 竹中智泰（常葉学園大） 中谷英明（神戸学院大） 林隆夫（同志社大） 引田弘道（愛知学院大） 松田祐子 清水由美子 伏見誠（以上院生）

フランス・ロマン主義の研究 班長 宇佐美 齊

過去4年間にわたって、フランス・ロマン主義の多角的な分析とその総合をめざして、各班員の口頭発表、討論を中心に研究会を積み重ねてきた。最終年度にあたる1990年4月以降は、成果報告書の作成に向けて論文の執筆作業にかかり、初稿のできたものから順次検討会にはかって相互批判を重ねた。執筆者全員の最終稿が出揃った秋以降は、編集作業と平行して、これまでの成果を踏まえつつ更に新たな展望を切り開くべく、いくつかの口頭発表がなされた。なお成果報告書は1991年3月に、『フランス・

ロマン主義と現代』と題して、筑摩書房より刊行された。

班員 宇佐美齊 大浦康介 阪上孝 鈴木啓司 ジャン＝マリー・シェフェール（以上所内） 浅田彰（経済研） 稲垣直樹（教養部） 井上輝夫（慶応大） 柏木隆雄（大阪大） 柏木加代子（京都市芸大） 小西嘉幸（大阪市大） 小山俊輔（立命館大・非） 島本浣（帝塚山学院大） 丹治恒次郎（関西学院大） 露崎俊和（千葉大） ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大） 内藤高（同志社大） 西川長夫（立命館大） 丸岡高弘（南山大） 吉田典子（神戸大）

1991年

1月26日 ランボーにおける「私」の問題

宇佐美

2月16日 <<Romantique>>に戻って 大浦

3月31日 芸術における「模倣」の理論をめぐって 小西

儀礼的暴力の研究

班長 田中雅一

初年度（1990年）にひきつづき、多様な視点より暴力の宗教的意味合い、および儀礼における暴力の要素を論じた。今年度はとくに外国から二人のゲスト・スピーカーを招いて議論を深めることができた。

班員 田中雅一 井狩彌介 佐々木博光 鈴木啓司 谷泰 富永茂樹 藤田隆則（以上所内） 菅原和孝（教養部） 青木恵理子（民族学振興会） 阿部泰郎（大手前女子大） 大越愛子（近畿大） 大塚和夫 小長谷有紀 田辺繁治 吉田憲司（以上国立民族学博物館） 小田亮（桃山学院大） 春日直樹（奈良大） 川村邦光 松村一男（以上天理大学） 栗本英世（東京外大） 長島佳子（大阪学院大） 松田素二（大阪市立大） 三浦耕吉郎（仏教大） 岡田浩樹（総合研究大学院大学院生） 棚瀬慈郎 西井涼子（以上学振特別研究員）

1991年

1月21日 19世紀中葉までのフィジー社会の戦争と食人 春日

2月4日 アフリカの誕生—暴力としての理解の範型— 松田

18日 古代インドの祭式とアヒンサー（不殺生） 井狩

3月11日 シャリバリ儀礼の転用をめぐって

- 三浦
4月8日 暴力と崇高—暴力再考— 今村仁司
22日 「交換と暴力」再考 小田
5月13日 Ritual King as Peace Maker of
Violence and Suspense
シモン・シモンズ
20日 モンゴルの家畜屠殺の儀礼から
小長谷
9月6日 Maityrdom and Feud: Two Forms
of Violence ヴィーナ・ダース
30日 LIDの世界理解と暴力的なもの
青木
10月14日 パリ人の世界における暴力 栗本
11月18日 ドイツ人の西欧観 佐々木
12月9日 八幡の放生絵をめぐって 阿部
記号・意味・文学 班長 大浦康介
本年度より発足したこの研究班は、文字一般に関
する理論的探究をその目的とする。「文字とは何か」
という古くかつ新しい問題を中心に据え、構造主義
以降の言語学・記号論的成果を批判的に踏まえつつ、
文学理論の新たな地平を美学、心理学、社会学など
他の学問の領域とも関連づけながら模索しようとし
るものである。
班員 大浦康介 宇佐美齊 斎藤希史 J. M. シ
ェフェール Y. M. アリュウ 鈴木啓司（以上所
内） 田口紀子 吉田城（以上文学部） 石田英敬
石雅彦（以上同志社大） 後藤尚人（神戸大） 小
西嘉幸（大阪市大） 小山俊輔（立命館大） 多賀
茂（和歌山大） 丹治恒次郎（関西学院大） ピ
エール・ドゥヴォー（甲南女子大） 丹生谷貴志
（神戸市外大） 山路龍天（同志社大） 山田広昭
（神戸大）
1991年
4月27日 問題提起 大浦
5月11日 日記と小説のあいだ—『鍵』をめぐ
って— 大浦
6月1日 『京の茶清け』の解体—市の言葉—
小山
22日 テキストとドキュメント 鈴木
7月6日 精神分析批評の諸問題—主体と歴史
をめぐって— 山田
10月12日 詩の翻訳を考える アリュウ

- 11月2日 詩のことは—意味のゆらぎと読者の
関与をめぐって— 宇佐美
9日 Entre la musique et le texte
ドゥヴォー
12月21日 〈趣味〉の問題—18世紀の美学理論
— 小西

東 方 部

- 中国近世の法制と社会 班長 梅原 郁
本研究班では、1986年から5年間に亘って中国近
世、特に宋代の重要な法制史料である『慶元条法事
類』と『名公書判清明集』とを精読してきたが、最
終年度にあたる本年は、かかる蓄積をもとに中国近
世の法制・社会に関する研究発表も併せ行った。
前近代中国の法制 班長 梅原 郁
前近代の中国社会において、法制が重要な柱のひ
とつをなすことは言を俟たぬであろう。本研究班は、
5年間の予定でこの課題についての研究を深めてゆ
こうとするものである。さしあたっては、律令格式
という古代中国法制の骨格が形成された唐代に成っ
た『通典』の「刑法典」を通読して古代法制史の概
要をつかみ、一方で簡牘を中心とする新出の法制史
料にも注意を払いつつ進めてゆきたい。
文人の生活 班長 荒井 健
1986年度より90年度まで、旧中国の文人の生活に
ついて、精神的・物質的両面から検討を行ってきた
本班は、91年3月を以て研究終了。これまで会読を
続けた「長物志」訳注を研究報告として刊行予定。
中華文人の生活 班長 荒井 健
1991年より2年間の予定で、旧中国の文人の生活
全般について、「文人の生活」班の成果をふまえ、
総合的に研究を行いたい。研究の進めかたとしては、
旧班と同じく、各分野の報告と並行して、明代の最
も広範囲の生活文化資料たる「遵生八牋」の内容を
検討する。今期は八牋のうち霊秘丹藥牋および燕閑
清賞牋に眼を通した。
4—8世紀の中央アジアとインド 班長 桑山正進
1986年4月からはじめたこのテーマの研究班は
1991年3月で終了した。とりあげた行歴僧傳は慧超
『往五天竺國傳』と圓照撰「大唐貞元新譯十地經等
記」すなわち悟空の行記であり、それぞれに現代語

訳と詳細な注を施すことができた。1991年1月—3月は両者の訳文を重ねて検討し、これを基に前者は当研究所の1991年度の出版物のひとつとして『往五天竺國傳研究』の名で公刊されることになり、現在印刷中。後者は『東方學報』に掲載予定。

法顯傳研究

班長 桑山正進

「4—8世紀の中央アジアとインド」に続いて組織した研究班は名称のとおり『法顯傳』の会読である。5世紀初頭に中央アジアからガンダーラ、中インドを経てスリランカにてマヒーシャーサカ部の戒律の原典を得、南海より中国に帰った法顯の行歴記は、当時の中央アジア、インドの仏教事情を描写している。19世紀の仏訳注1例、20世紀初めの英訳注3例、日本語訳注2例があるけれども、いずれもout of date かおごなりである。そこで当班は章巽『法顯傳校注』（上海古籍出版社、1985）をテキストにその注を読みつつ、これらの諸訳を照合し、また『水經注』の記事を参照して、拠るべき現代語訳を作成し、あわせて5世紀の中央アジアとインドを班員の専門分野である歴史、言語、宗教、考古、美術など多角視点をもって検討する。第1年度前半は『往五天竺國傳研究』作成にあて、後半より『法顯傳』を開始。なお班員の会読分担当は以下のとおり。高田時雄、序から校注説明まで；森安孝夫、于闐まで；吉田豊、竭叉から陀歴まで；春田晴郎、烏長から弗樓沙まで；小野浩、那揭から毗茶まで；定金計次、摩頭羅から沙祇大國まで；入澤崇、拘薩羅舍衛國から佛般泥洹處まで；中谷英明、毗舍離から犍沙王舊城まで；武内紹人、伽耶城から多摩梨帝まで；井狩彌介、師子國；稻葉稜、浮海東還；船山徹、高僧傳中の法顯、智嚴、寶雲の傳記；榎本文雄、經錄等。

六朝道教の研究Ⅱ

班長 吉川忠夫

「六朝道教の研究」班は1991年3月をもって終了し、4月からあらたに同Ⅱの研究班が5カ年の計画で発足した。ひきつづき『真誥』7篇全20巻の会読を行い、第9巻・第10巻協昌期篇の訳注を作成した。なお3月をもって終了した研究班の成果報告は、『中国古道教史研究』として1992年2月に同朋舎出版から刊行の予定である。収載論文は13篇。

1920年代の中国

班長 狭間直樹

本研究会は、研究する時期を「20年代」にしぼる

ことによって、時代史的視覚、および世界史の共時的視覚から国民革命期中国の諸相をとらえなおそうとするものである。各班員が、政治、経済、社会、思想、文化などの諸テーマについて研究をすすめていることは以前と同様である。また、本研究会は国外の研究者とも積極的に交流の機会を持つようつとめている。5月24日喬志強氏（山西大学教授）、9月25日丁守和氏（中国社会科学院近代史研究所研究員）、11月1日劉望齡氏（華中師範大学教授）、饒懷民氏（湖南師範大学副教授）の報告は、それぞれ本研究所以来訪のおりにお願いしたものである。

中国中世の文物

班長 礪波 護

本研究班はこの3月をもって終了した。5年間の研究成果は、1993年春に論集として刊行する予定。

秦漢隋唐の文物資料

班長 礪波 護

前研究班に引き続き、もはや補助資料の域を脱して、当該時代の歴史研究に不可欠となりつつある考古・文物資料の整理、考究を行う。近年の文物の発表は、個人では応接に暇ない程の量に達しており、隔週水曜日の集まりが、情報の交換、消化の場としても有効に機能することが合わせて目指されている。

中国古代礼制研究

班長 小南一郎

前年より引き続き、本研究班では「周礼」春官篇を買公彦の疏で読みつつ、本文とその鄭玄注とを和訳し、注釈を付けている。本年度は、礼の場で用いられる玉や祭服、墓葬の制度などについての規定を読み、家人職にまで進んだ。経注本でいえば、春官篇のほぼ半ばまで読んだことになる。「周礼疏」の解説と並行して、班員による発表が行われた。

明末清初の社会と文化

班長 小野和子

本研究班は、1991年から1995年までの4カ年計画で、今年度、新たに発足したものである。1989年に刊行された共同研究報告「明末清初期の研究」の成果を受け継ぎながら、政治・社会・経済・文化など個別の領域における研究をさらに進めるとともに、この時代を総体として把握するための共通した視点を確立できるよう努力したい。研究会は、個人の研究発表と会読を交互に行っているが、会読については、この時代を生きた人物を通して、時代の諸相に迫りたいと考え、伝記・墓誌銘を選読している。

六朝美術の研究

班長 曾布川 寛

1990年4月から5年の計画で始まった本研究班は、

六朝を中心に後漢、隋唐を含めた時代を扱い、この時代の美術全般についてより精確な理解をめざそうとするものである。具体的方法としては出土文物、石窟寺院などの仏教美術、画論や書論の芸術論を3本の柱に取り上げることにする。今年は班員の各々専門分野における発表を行ったが、2年度目の4月からは会談を公式に併せ行い、前期は芸術論として姚最『統画品』（曾布川寛担当）、积彦悰『後画録』（河野道房担当）、索靖『草書状』（下野健児担当）を取り上げた。

中国語史の資料と方法

班長 高田時雄

本研究班は、中国語史の総体的再構築を目指して、資料と方法の面からその基礎的整備を行うべく昨年度から発足したが、2年目の今年も各班員の研究発表に基づき多角的な分析・討論をおこなった。

中国技術史の研究

班長 田中 淡

本研究班は、1991年4月から向こう5カ年の予定で、中国の伝統的技術の特質について、とくに生活科学・技術の関連分野を主たる対象としてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするものである。当面、研究会は技術史全般に関わる分野を主とし、関連の特定分野を副とする2本だての構成をとり、前者は元・王禎の『農書』、後者は梁啓雄輯『哲匠録』疊山篇をそれぞれテキストに選び、会読・訳注作成をすすめてゆく予定である。また、それと並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を随時おこなう予定である。

標記の期間に『農書』農器図譜・田制門の訳注を小林清市・川原秀城・武田時昌、『哲匠録』疊山篇の校補・訳注を田中淡・外村中がそれぞれ担当した。

客 員 部 門

人文学のアナトミー

班長 山田慶児

グラント・セオリーの有効性が疑わしくなり、人文諸科学の専門化と細分化が進んだ現在、人文学は一つの転機に立っている。この研究会は、この知的な好機をふまえながら、人文学の方法論を中心とする新しいパラダイムの構築をめざしている。当面の課題は、これまで蓄積されてきた人文諸科学のテキストの再検討にあるが、その重点は、テキストを歴史の実証の観点から読むことでなく、そのテキストがふくむ可能性を抽きだす読み方で読むことにある。

班員	山田慶児	荒井健	井狩彌介	宇佐美齊
大浦康介	阪上孝	佐々木克	佐々木博光	鈴木啓
司	田中雅一	谷泰	富永茂樹	藤田隆則
也	光永雅明	山室信一（以上所内）	水嶋一憲	
4月23日	ウエーバー『職業としての政治』、			
	『職業としての学問』	山田		
5月14日	ランボー『地獄の季節』、ニーチェ			
	『善悪の彼岸』	宇佐美		
28日	ベートソン『精神の生態学』	谷		
6月25日	マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』	阪上		
7月9日	フロイト『妄想と夢』、イェンゼン			
	『グラディヴァ』	大浦		
9月24日	スピノザ『国家論』	水嶋		
10月8日	ライプニッツ『モナドロジー』	鈴木		
22日	吉川幸次郎『阮籍の「詠懐詩」について』、			
	『唐代の詩と散文』	荒井		
11月12日	ユング『自我と無意識の関係』	河合隼雄（ゲスト）		
26日	マリノウスキー『原始言語における意味の問題』	藤田		
12月10日	ソボクレス『オイディプス王』、レヴィ＝ストロース『神話の構造』	田中		

Ⅱ 個 人 研 究

日 本 部

日本近代文化史の研究	飛鳥井雅道
日本ファシズムの研究	古屋 哲夫
植民地経済の研究	山本 有造
廃藩置県の研究	佐々木 克
文化史および文明史としての国民国家の形成	横山 俊夫
日本近世社会における政治権力	藤井 譲治
政治文化の中の社会理論	山室 信一
近代朝鮮の政治と社会	水野 直樹
日本近代文学の研究	平田 由美
近代日本形成期における地域構造	奥村 弘
日本近世の地域社会の研究	塚本 明
士族の研究	落合 弘樹

彙 報

文学と近代
貨幣の研究

齋藤 希史
安富 歩

中国における革命主体形成の研究 小林 敦子
中世近世の中国絵画研究 河野 道房
イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北インド

西 洋 部

西洋論理思想史
社会的相互行為の解説
思想と制度
シュメール行政・経済文書の研究
インド世界の儀礼の研究
フランス散文詩の研究
群衆現象の社会学
南アジアにおける宗教と社会
文学理論の研究
ヨーロッパ12世紀の論理学と意味論
デカダンス文学における自己矛盾の研究

山下 正男
谷 泰
阪上 孝
前川 和也
井狩 彌介
宇佐美 齊
富永 茂樹
田中 雅一
大浦 康介
岩熊 幸男

唯識思想研究 稲葉 穰
中国中世の政治と社会 船山 徹
中国共産主義運動の歴史と思想 辻 正博
唐宋時代の士人 石川 禎浩
宋元道教研究 中砂 明德
明清時代の官僚制度 横手 裕
谷井 陽子

事 業 概 況

夏期公開講座

音声形式の記述と分析 鈴木 啓司
フレデリック・ハリスンとイギリス実証主義 藤田 隆則
ドイツ中世のエトノス 光永 雅明
佐々木博光

1991年7月 於 本館大会議室
一神 話—
12日 儀礼と神話—古代インドの祭式世界から—
井狩 彌介
中国神話の諸様相—女媧を中心に—

東 方 部

中国の詩学 荒井 健
宋代の官僚制度 梅原 郁
六朝隋唐精神史 吉川 忠夫
隋唐政治社会史研究 礪波 護
五四時期中国社会主义の研究 狭間 直樹
ポスト=クシャーナー期中央アジアの考古学的研究

13日 出自神話でみるドイツ史 小南 一郎
18世紀日本の神話論争—本居宣長と上田秋
佐々木博光
成— 飛鳥井雅道
シンポジウム パネラー 全 講演者
中務 哲郎（文学部）
谷 泰
司 会 大浦 康介

古代中国における説話伝承の研究
東林党の研究
原始仏教起源論
中国中世土地所有制の研究
六朝道教思想研究
中国美術の様式と意味
中国建築の様式・技法・空間
近代中国の綿紡織業
敦煌文書の言語史的研究
中国古代中世の法制
明清學術史の研究
清朝前期における士大夫の思想
漢唐間における天文学と文化

桑山 正進
小南 一郎
小野 和子
荒牧 典俊
勝村 哲也
麥谷 邦夫
曾布川 寛
田中 淡
森 時彦
高田 時雄
富谷 至
井上 進
三浦 秀一
新井 晋司

開所62周年記念公開講演会
1991年11月7日 於 本館大会議室
絵の評価—中国画論史の一側面— 河野 道房
植民地下朝鮮民族解放運動の空間 水野 直樹
シュメール粘土板文書にみえる耕地の形状
前川 和也

彙報（1990年1月～1990年12月）

研究成果の刊行

ZINBUN（欧文紀要）No. 25

I 紀 要

人文学報 第67号

- I 第五議会における天皇の影—呪縛の構造の進行
状況— 飛鳥井雅道
初期議会の貴族院と華族 佐々木 克
公民権・名誉職制・等級選挙制—地域社会編成
からみた明治憲法体制— 奥村 弘
都市の再編成と非差別部落—京都市中とその周
辺を舞台にして— 辻 ミチ子
II 国民国家・日本の発現—ナショナリティの立論
構成をめぐる— 山室 信一
近代天皇制における「以心伝心」のシステム
羽賀 祥二
明治国家における位階について 藤井 譲治
教育勅語撤回風説事件と中島徳蔵 小股 憲明
III 法隆寺の発見 井上 章一
反動と流行—明治の西鶴発見— 平田 由美

人文学報 第68号

- 西南戦争における西郷隆盛と士族 佐々木 克
近世前期の都市社会における脅迫と告発—張札・落
文をめぐる— 塚本 明
形而上学の虚妄性 山下 正男
普遍化を目指す道徳的相対主義—道徳における相対
主義と普遍主義的志向は矛盾するか— 浜野 研三
「満洲国」の法と政治—序説— 山室 信一
彙報（1990年1月～1990年12月）

東方学報 第63冊

- 漢代祠堂画像考 佐原 康夫
王逸「楚辞章句」をめぐる—漢代章句の学の一側
面— 小南 一郎
南朝帝陵の石獸と磚畫 曾布川 寛
唐代貶官考 辻 正博
明鏡與泉流—論南宗禅影響於詩的一個側面— 孫 昌 武

Takanori Fujita, Cultural Synchrony in Performance: An Examination of the Musical Use of the Japanese Word *Nori*

Hiromitsu Sasaki, Deutsches *Ethnos* in der Entstehungszeit

Michael Witzel, Notes on Vedic Dialects (1)

Institute for Research in Humanities, Staff and Seminars: 1990

II 研究報告その他

中国古代科学史論 続篇 山田慶兒編
1991年3月30日刊

真詰索引 麥谷邦夫編

1991年3月30日刊

供犠と靈力（欧文） 田中雅一編

1991年12月28日刊

所報「人文」第37号

1991年3月30日刊

所 員 動 静

・三浦秀一助手（東方部）は、東北大学文学部講師に昇任（3月1日付）。

・小林敦子助手（東方部）は、辞任（3月31日付）の上、早稲田大学教育学部講師に就任。

・吉川忠夫教授（東方部）は、所長、文献センター長に併任（任期4月1日～1993年3月31日）。

・井上 進助手（東方部）は、三重大学助教授に昇任（4月1日付）。

・平田由美助手（日本部）は、大阪外国語大学助教授に昇任（4月1日付）。

・奥村 弘助手（日本部）は、神戸大学文学部助教授に昇任（4月1日付）。

・荒牧典俊教授（東方部）は、大阪大学文学部教授より配置換（4月1日付）。

・小野和子教授（東方部）は、三重大学人文学部教授より配置換（4月1日付）。

・山田慶兒国際日本文化研究センター教授は、併任教授（西洋部）（比較文化部門、4月1日～1992

年3月31日)。

- ・岸本美緒東京大学助教授は、併任助教授(東方部)(比較文化部門、4月1日～1992年3月31日)。
- ・水野直樹氏を助教授(日本部)に採用(4月1日付)。
- ・落合弘樹氏を助手(日本部)に採用(4月1日付)。
- ・齋藤希史氏を助手(日本部)に採用(4月1日付)。
- ・安富 歩氏を助手(日本部)に採用(4月1日付)。
- ・岩熊幸男助手(西洋部)は、講師に昇任(5月1日付)。
- ・横手 裕氏を助手(東方部)に採用(9月1日付)。
- ・河野道房助手(東方部)は、辞任(11月30日付)の上、大阪府立大学総合科学部講師に就任。
- ・谷井陽子氏を助手(東方部)に採用(12月1日付)。
- ・山本有造教授(日本部)は、1月4日伊丹発、台湾に於いて、日本の多民族国家体験とその歴史的意義に関する資料調査を行い1月10日帰国。
- ・山室信一助教授(日本部)は、1月4日伊丹発、台湾に於いて、近代東アジア世界における社会思想の循環に関する資料調査および研究交流を行い1月10日帰国。
- ・高田時雄助教授(東方部)は、3月13日伊丹発、パリ第七大学において敦煌資料による中国語史の研究及びライデン大学他において資料蒐集を行い、6月17日帰国。
- ・山本有造教授(日本部)は、5月3日伊丹発、台湾に於いて開催の日中文化差異討論会に出席及び研究資料蒐集を行い5月8日帰国。
- ・富永茂樹助教授(西洋部)は、文部省在外研究員旅費により、6月17日成田発、フランス・応用認識論研究センターにおいて群衆行動と集合意識の生成の研究に関する実地調査及びスタンフォード大学、ケベック大学において資料蒐集を行い1992年4月16日帰国の予定。
- ・前川和也教授(西洋部)は、7月6日伊丹発、大英博物館においてシュメール楔形文書の研究及びフランス学士院において研究打合せを行い、8月

30日帰国。

- ・田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科学研究費補助金により、7月7日伊丹発、インド・スリランカにおいて上座部仏教圏における宗教と社会に関する研究・調査を行い、8月26日帰国。
- ・光永雅明助手(西洋部)は、7月9日伊丹発、大英図書館、シェフィールド大学等においてイギリス実証主義の比較史的研究に関する研究資料蒐集を行い8月23日帰国。
- ・富谷 至助教授・辻 正博助手(東方部)は、7月27日伊丹発、中華人民共和国・蘭州・文物考古研究所において開催の中国漢牘国際学術討論会出席及び敦煌周辺遺跡群他にて研究資料蒐集を行い8月9日帰国。
- ・水野直樹助教授(日本部)は、7月12日伊丹発、カリフォルニア大学、ソウル大学等に於いて近代朝鮮の政治と社会に関する研究調査及び資料蒐集を行い8月8日帰国。
- ・谷 泰教授(西洋部)は、7月18日成田発、大英博物館、マンチェスター大学、イタリア、ギリシャ、インドに於いて象徴としての家畜—その文化人類学的研究に関する資料蒐集、実地調査及び研究打合せを行い9月19日帰国。
- ・小野和子教授(東方部)は、8月16日伊丹発、復旦大学に於いて明史国際学術討論会参加及び研究資料蒐集を行い8月26日帰国。
- ・安富 歩助手(日本部)は、8月16日伊丹発、タイ王国に於いて大東亜共栄圏下のタイ王国経済史に関する研究資料蒐集を行い9月1日帰国。
- ・狭間直樹教授(東方部)は、8月28日成田発、ハワイ大学イースト・ウエストセンターに於いて開催の辛亥革命80周年記念シンポジウム出席及び研究資料蒐集を行い、9月4日帰国。
- ・高田時雄助教授(東方部)は、9月22日成田発、コレージュ・ド・フランスに於いて、第6回日仏コロック東洋学会参加及び研究資料蒐集を行い10月5日帰国。
- ・梅原 郁教授(東方部)は、9月25日伊丹発、ギメ博物館、大英博物館他に於いて旧中国法制史に関する研究資料蒐集を行い、10月9日帰国。
- ・岩熊幸男講師(西洋部)は、10月1日伊丹発、ウイスコンシン大学に於いて開催されたシンポジウ

- ム中世唯名論の起源と意味に出席・発表し、連合王国、スペインにて研究資料蒐集を行い、10月13日帰国。
- 曾布川寛助教授（東方部）は、10月12日伊丹発、北京大学、故宮博物館、雲岡石窟他に於いて中国美術に関する実地調査及び研究資料蒐集を行い、11月1日帰国。
 - 勝村哲也助教授（東方部）は、10月21日伊丹発、北京市に於いて開催の中国中文信息学会漢字編碼專業委員会國際學術討論会に出席して、10月25日帰国。
 - 森 時彦助教授（東方部）は、10月11日伊丹発、國際研究集会派遣旅費により、武漢市に於いて開催の辛亥革命と近代中国國際學術討論会に参加して、10月21日帰国。
 - 石川禎浩助手（東方部）は、10月11日伊丹発、武漢市に於いて開催の辛亥革命と近代中国國際學術討論会に参加、中国社会科学院にて研究資料蒐集を行い、10月24日帰国。
 - 田中 淡助教授（東方部）は、11月10日成田発、ハイデルベルグ大学芸術史研究所に於いて中国庭園史に関するセミナー出席及び研究資料蒐集を行って、1992年3月1日帰国予定。
 - 横山俊夫助教授（日本部）は、11月20日伊丹発、ヴィクトリア・アルバート博物館等において、ジャパン・フェスティバル1991の調査及び研究資料蒐集を行って11月28日帰国。
 - 佐々木博光助手（西洋部）は、11月28日伊丹発、ドイツ連邦共和国、ゲオルク＝エックハート國際教科書研究所に於いて近代ドイツの自己認識・他者認識に関する研究資料蒐集を行って12月19日帰国。
 - 齋藤希史助手（日本部）は、12月20日伊丹発、復旦大学、北京大学等に於いて中国清末翻譯小説に関する研究資料蒐集を行って12月31日帰国。
 - 吉田光邦名誉教授は7月30日逝去された（70才）。